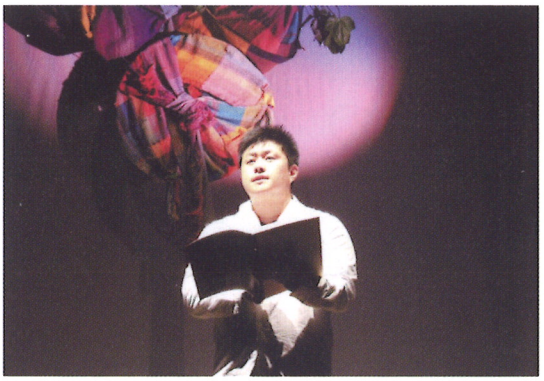
2016

市民みんなの文化祭

十一月二十七日（日）／午後一時半

県立図書館レクチャールーム



写真は、参加団体の舞台、
ならびに稽古風景から

参加団体　明日を紡ぐ大地の会　花柳流「むつみ会」「かすみ会」
かなりやの会　ギタ・ハモ・レレ・アンサンブル　ママバンド
オリコーダーと子どもたち　藤村　順子（フルート演奏）　SAORI山口

主　催　明日を紡ぐ大地の会
助　成　公益財団法人山口きらめき財団　山口メセナ倶楽部
後　援　山口県教育委員会　山口市　山口市教育委員会　山口商工会議所
読売新聞西部本社　朝日新聞社　山口新聞社　中国新聞防長本社
毎日新聞社　KRY山口放送　tysテレビ山口　yab山口朝日放送
山口ケーブルビジョン　山口県平和運動フォーラム
参加費　一般800円　高校生以下無料　市内各プレイガイドで発売中

主催者連絡先　083・921・2476　（福島）

明日を紡ぐ大地の会創立五周年記念公演

明日の考察（みょうにち こうさつ）—詩人・石川啄木入門

作・構成　福島久嘉

勝っても負けても戦争は地獄—啄木詩の原点

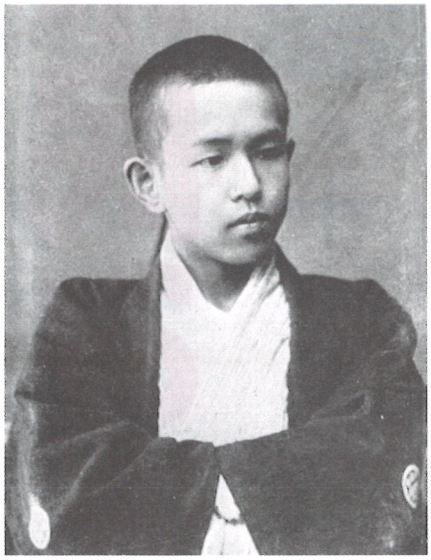
石川啄木は、明治一八年に生まれました。幼いころから天童とよばれ、一七歳で『明星』デビューを果たし、一九歳には処女詩集「あこがれ」を出版するなど、ひとも羨む幸運児でした。

しかし、彼の運命は、日露戦争後の世界的な大不況と、戦争にたいする国民の不満の爆発の中で急転しました。一七、八歳の頃までは、海軍軍人になることに憧れ、熱烈な愛国青年であった啄木は、父が寺の住職を追われ、自分が一家を支える立場になって、初めて冷静に日本の現状と、戦争の本質について考えるようになりました。

日清・日露の戦争で日本は大勝利をし、世界の一等国、文明国の仲間入りをしたと大宣伝されていました。しかし、実際はどうなっていたのか。

戦争で十万人もの戦死者をだし、農村は疲弊し、失業者が溢れ、若者に未来と自由は見えず、街には売春婦と極道息子が溢れていました。

戦争は勝っても負けても地獄だったのです。しかし、戦争に負けたロシアでは、皇帝の圧政に抗して民衆が立ちあがっていました。自分たちの運命を自分たちで変えようと命を懸けてたたかっていました。これこそ真の文明だ！　日本の青年の希望もそこにあるのではないか？　啄木はそう考えました。自分たちの力でこの国の「時代閉塞」の現状を見据え、打ち破るために、「明日の考察」を深めようではないか！　……石川啄木の詩の原点は、ここにあったと、私は思っています。（演出担当　福島久嘉）



１７歳ごろの石川啄木

渋民村に建つ啄木の歌碑

啄木の歌から

やはらかに柳あをめる
北上の岸邊目に見ゆ
泣けとごとくに

東海の小島の磯の白砂に
われ泣きぬれて
蟹とたわむる

己が名をほのかに呼びて
涙せし
十四の春にかへる術なし

石をもて追わるるごとく
ふるさとを出でし悲しみ
消ゆることなし

たはむれに母を背負ひて
そのあまり軽きに泣きて
三歩あゆまず

はたらけど
はたらけど猶わが生活
楽にならざり
ぢっと手を見る

子を負ひて
雪の吹き入る停車場に
われ見送りし妻の眉かな

こころよく
我にはたらく仕事あれ
それを仕遂げて
死なむと思う

怒る時
かならず一つ鉢を割り
九百九十九割りて死なまし

腕拱みて
このごろ思ふ
大いなる敵目の前に踊り
出でよと

ダイナモの
重き唸りの心地よさよ
あはれこのごとく
物を言はまし

新しき明日の来るのを
信ずといふ

自分の言葉に
嘘はなけれど——